

またまた、着床前診断に纏わる報道に接して...

今朝の TV 報道（慌ただしい時間帯だったので、どこの民放局かさだかでない）で、日本産婦人科学会が、「着床前診断に関し、20歳前に発病する重い遺伝性の病気であること」との基準を示し、その代表例として筋ジストロフィ - デュシェンヌ型と報道していた。

私は長年、筋ジストロフィ - デュシェンヌ型の方々とも係わってきたが、重い症状であっても、人として素晴らしい生き方をしている多くの方々に出会ってきただけに、この報道に怒りさえ覚えた。

そこで、確認のためにネット検索した。確かに、asahi.com には、「学会の小委員会は、慶応大学からの申請を認める答申を倫理委員会に報告した」との報道があった。念のために、学会の HP を検索した。そこには、学会広報担当常務理事名で、今日の日付で厚生労働省の記者クラブに、「今後各方面の関係者の意見を伺いながら検討する予定であり、まだ学会としての最終結論が出ていない段階での報道については慎重であるように」との趣旨の文章を送付したことが記載されていた。

私としては、一時、ほっとしたと同時に、「各方面の関係者の意見を伺いながら」の字句に期待したく、今まで、また今も筋ジストロフィ - デュシェンヌ型の方々に係わっている関係者の方々に、ぜひ意見を公表し、産婦人科学会に届く努力をしていただきたいと思います。

確かに、着床前診断については、「重い遺伝性の病気に限り、個別に審査して認める」の学会指針があり、病名一律の対応ではなさそうであるが、やはり小委員会の基準が最終結論となれば、影響は大である。

人間の、その人の責任でない属性で、人間の存在を区分けしたり、疎外する論理に繋がるようなことは辞めて貰いたい。

WHO は、健康の概念を「身体的、精神的、社会的に安寧な状態にあることであり、ただ単に疾病、または病弱でないという状態ではない」と唱っている。

虐待、いじめ等々の生命軽視の不健康な社会現象の起因こそを、社会現象生起前診断して貰いたい。現に生活しているデュシェンヌ型の方々の尊厳に係わることなのに、何のコメントなしで単に情報提供だけのマスコミも、世論形成に多大な影響を与えるだけに、社会現象生起前診断の対象の一つとなるような気がする。

（2004年06月19日 記）